

解題

広島大学総合科学研究科 鈴木俊哉

広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究, 12 卷(2017)に掲載された『説文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について」(<http://doi.org/10.15027/45239>)の補助データとして平津館本の影印を公開する。

1. 資料画像について

本資料は、国立公文書館所蔵の平津館本説文解字(請求番号 371-0043、漢 3184、第 48 冊、昌平坂学問所旧蔵)の画像を 2 値化およびトリミングしたものである。具体的には、原本を 400dpi でスキャンした 4970×4478 画素の JPEG 画像に対し、50%に縮小した上で、明度 56%を閾値として 2 値化した。汚れや虫損の塗りつぶし、不鮮明な部分に対する加筆修正などはしていない。表紙および裏表紙は全体が映るよう、本文は天地を除くよう表示上のトリミングをしている。トリミングのパラメータは原画像サイズに対して

表紙・裏表紙: 上 238、下 280、左 264、右 234 ピクセル

本文: 上 850、下 425、左 264、右 234 ピクセル

である。

本資料には、2 値画像のみの頁と、2 値画像の上に部分的にカラー画像が乗っているように見える頁がある。容量削減のため大半を 2 値画像にしているが、蔵書印や表紙のカラーバーなど 2 値画像では支障が出る部分がある箇所に関しカラー画像を追加した。カラー画像は元の JPEG 画像を 25%縮小し、品質 30%で JPEG 再圧縮したものである。

トリミングは PDF のマスククリッピングにより表示上トリミングされているだけであり、PDF の内部にはトリミングされていない画像が格納されている。PDF ビューワからのオブジェクト単位のコピーペースト、あるいは PDF から画像への変換ソフトを用いればトリミングされていない画像を取り出すことが可能である。

2. 平津館本とその翻刻および影印について

清中期(嘉慶年代以降)には宋刊小字本説文解字の翻刻がいくつか行われた。これ以前には、汲古閣大字本説文解字が参照されていたが、段玉裁の『汲古閣説文訂』により、これが宋本の忠実な翻刻ではないことが判り、より宋本に近い翻刻が望まれた結果と言えるだろう。平津館叢書は孫星衍により出版された 43 種 254 巻からなる叢書で、文字学あるいは小学に限定したものではないが、この中に説文解字が含まれている。

封面には嘉慶甲子(嘉慶9年、1804)の年記があり、また、序の末尾には嘉慶14年(1809)の年記がある。そのため、所蔵機関によって1804年出版と扱う場合と、1809年出版と扱う場合がある。この年記の違いを根拠に平津館本説文解字にも初版と第二版があるとする論文もある[1]。しかし、確認できる限り、1804年の封面を持つが序文を持たない、あるいはより早い年記の序文を持つ、というものは見当たらない。おそらく、平津館叢書の一部として出版されたため、叢書の出版事業の開始時点で封面の版木が準備されたものの、実際に説文解字が刷られるまでには時間差があったためと推測される。

孫星衍の没後、平津館叢書そのものが翻刻されたり(呉縣朱記榮重刻平津館叢書、光緒年間)、叢書と別に単独で翻刻したもの(蘇州浦氏修補重印本、平江洪氏翻刻本)が広く出回った。その中でも、後に陳昌治が検索の便を図ってレイアウトしなおした、いわゆる「一篆一行本」は非常に広く行われた。ただし、これらの翻刻本は必ずしも孫星衍による初版の通りに彫ってはならず、周祖謨は誤刻が多いと批判している[2]。

宋刊小字本の参照資料は、民國初期に王昶・陸心源旧蔵本(いわゆる「岩崎本」)が影印出版されたことにより、これに移っていく。しかし、清代に広く行われた影響もあり、その後も平津館本を別の叢書に組み込んだ出版も続いた(百部叢書など)。また、今世紀に入って王昶旧蔵本以外の宋本が確認できるようになってからも、王貴元氏の『説文解字校箋』のように、平津館本に対して宋本を使って校訂を加えたものなどが出版されている。倉田淳之助が「説文展観余録」[3]で述べた「景印王本出でて孫本廃すべしとは私の言い得ないところである」との言葉は、まさに至言だったと言えるだろう。

残念ながら、民國以降に影印出版技術が発達したものの、平津館本の初版を影印出版したのではなく、翻刻本の影印出版である場合が多い。たとえば世界書局の影印本は光緒年間の呉縣朱記榮本の影印であるし、百部叢書の影印本は同治年間の陶升甫本に基づいている。しかも、封面を削除するなどしているので一見して底本が判りにくい。この障害への対応として、ここに国立公文書館所蔵の初版平津館本のデジタル画像を公開するものである。

謝辞

本資料の作成にあたり、科研費課題番号16K004600Aの補助を受けています。平津館本の重刻・翻刻本の調査に関しては、大西克也先生に多くの助言を頂きました。また、国立公文書館所蔵の平津館本の影印PDFのデータ設計および動作確認について、webサイト「稀少地名漢字リスト」主催の塚田氏に様々なご助言・ご助力を頂きました。深く感謝いたします。

参考文献

- [1] 洪阿李: 「説文字形研究以靜嘉堂、汲古閣、平津館、段注本第一卷為對象」, 國立臺灣師範大學碩士論文, 2006.
- [2] 周祖謨: 『問学集』, 中華書局 (1966-01), 下巻, p.760-800.
- [3] 倉田淳之助: 「説文展観余録」東方学報(京都) 第10冊第1分冊 (1939), p.145-154.